研究結果

本研究の対象は日本語の複合動詞、即ち「踏み潰す」のような、2つの動詞の複合によって形成される語である。本研究は、①日本語と中国語の結果複合動詞の比較研究及び②中国人学習者を対象とする日本語複合動詞の習得研究という2つの部分からなる。

①で扱う結果複合動詞とは、「踏み潰す」のような前項動詞(以下V1)が動作を表し、後項動詞(以下V2)がその結果を表す複合動詞である。中国語の場合、V2が自動詞でなければならない（例：「踩破（踏み-潰れる）」のようなもの）点は日本語との大きな相違である。従来はそういった相違点を中心に、両言語の比較研究が盛んに行われてきたが、本研究では、複合動詞と数量詞との関係を切り口として、両言語の複合動詞の類似点を述べた。まず複合動詞を目的語結果（「先生がペットボトルを踏み潰した」のような、V2が目的語の状態を表すもの）と主語結果（「先生が学生を叱り疲れた」のような、V2が主語の状態を表すもの）に二分した。目的語結果の複合動詞は、日本語と中国語はともに「先生がペットボトルを三つ踏み潰した」のように、数量詞の修飾語を付けることができるのに対し、主語結果の場合、「*太郎が学生を三人叱り疲れた」のような文は、日本語でも中国語でも大変不自然である。本研究はその現象を考察し、主語結果複合動詞に関しては日本語と中国語は類似した付加構造、即ち後項動詞をベースに前項動詞が付加されるという構造を持っていることを主張した。

②では、「～あがる/あげる」を材料として、上海海事大学日本語学部の2-4年生(計139人)に調査を行い、多くの学習者は「～あげる」を「～し始める」という意味で理解する傾向があることが分かった。例えば、「書きあがる」と「書きあげる」についてみると、「書きあがる」は64.9%が「書き終わる」と正しく理解できるのに対し、「書きあげる」は74.6%が「書き始める」と誤って理解している。それは複合動詞の理解においても「あがる/あげる」の自他動詞の対立の意識が影響し、しかも誤って「開始/完了」の意味の対立に置き換えて理解しているということが分かった。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表　(題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

題　　名　中国人学習者を対象とする日本語複合動詞『～あがる/あげる』の習得調査
発表者名　張超・川﨑千枝見・福田倫子
会 議 名　2009年度日本語教育学会秋季大会（2009年10月10日・11日、九州大学）

論文　(題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)
題　　名　日中の結果複合動詞と数量詞との共起に関する一考察
　　－主語結果複合動詞を中心に－
発表者名　張超
掲 載 誌　『漢日理論語言学研究(中日理論言語学研究)』(沈力・趙華敏主編)pp.365-373
　　(中国北京：学苑出版社　2009年6月出版)

書籍　(題名・著者名・出版社・発行時期等)

なし